

## 平成28年度第1回 仙台市総合教育会議 議事録

日 時 平成28年4月26日（火）13：30～15：30

場 所 仙台市役所本庁舎2階第1委員会室

出席者 仙台市長 奥山 恵美子  
仙台市教育委員会 教育長 大越 裕光  
仙台市教育委員会 委員 吉田 利弘  
仙台市教育委員会 委員 永広 昌之  
仙台市教育委員会 委員 草刈 美香子  
仙台市教育委員会 委員 今野 克二  
仙台市教育委員会 委員 齋藤 道子  
仙台市教育委員会 委員 加藤 道代

### 次 第

1. 開会
2. 協議
  - (1) 市立中学校生徒の自死事案について
  - (2) 平成28年度教育委員会の主要事業について
3. その他
4. 閉会

## 1 開 会

○事務局 それでは、定刻となりましたので、ただいまより平成28年度第1回仙台市総合教育会議を開会いたします。

はじめに、市長よりご挨拶申し上げます。

○奥山市長 皆さん、こんにちは。

本当に連休も間近、そしてまた新年度早々のお忙しい中、こうして総合教育会議にご参集を賜りましてまことにありがとうございます。

昨年度から始まりました、教育委員の皆様と私との間でさまざまな教育上の課題について意見交換をさせていただくというこの会議でございますが、昨年は振り返ってみますと、あの痛ましいいじめの自死事案などを受けの中で、教育大綱の策定に向けていじめの問題についても時間をかけてご議論をいただき、年末での成立ということにご尽力をいただいたところでございます。改めて心から感謝を申し上げます。

現在は、新年度も始まり、いじめに関連する施策も、さまざまな研修を初め各学校等でも取り組んでいただいているところでございます。そういう中で、昨日は田子小学校の児童の方が交通事故に遭われるという、これもまた以前にも事故等がございましたが、地域と一緒に登下校路の安全確認や改善などもしてきたところでありますけれども、やはり尊い幼い命が失われたということでは大変残念だと思っているわけでございます。やはり教育を取り巻く課題というのは本当に多方面に絶え間なく我々も目配りをしていかなければならないと改めて思ったところでございます。

そうしたことや、また熊本の今後の学校教育の動向なども気になるところでございますが、今日もまた、こちらから用意しました議題も含めまして、こういった喫緊の課題なども念頭に置きながら意見交換をさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いをいたします。

## 2 協 議

(1) 市立中学校生徒の自死事案について

○事務局 それでは、以降の進行は市長にお願いいたします。

○奥山市長 それでは、早速進めさせていただきます。

はじめに、本日の議事録でございますけれども、教育委員会側の署名委員といたしまして齋藤委員にお願いしたいと思います。よろしくお願いをいたします。

では、協議に入ってまいります。

まず、お手元の次第でお示ししておりますとおり、本日、協議の議題としては2件私のほうで考えさせていただいております。

先ほどご挨拶の中でも少し触れさせていただきましたけれども、26年9月に発生いたしました本市の中学生の自死事案を踏まえまして、この会議の場でも昨年大変深いご議論を各回においていただいたわけでもございました。そういう中で、やはり二度とこうしたいじめによる自死という痛ましい事案が起こってはならないということで、予算についても教育委員会からもいろいろな考え方を示していただき、私のほうでも精査をさせていただく中で一定の施策の予算措置も講じたところでございます。

また、県教委のほうともお話をいただいて、一番課題でありました人的なバックアップ体制ということについても4月をめどに一定の加配がなされて、今、現場でそうした専任の対応を確保できるところまで至ったというのは教育委員の皆様初め多くの方のご理解とまたバックアップのおかげであると、私も大変心強く思っているところでございます。

そしてまた、この4月に入りましてから、ご承知のとおり専門委員会の第2回目の調査につきまして、教育委員の皆様の再発防止策に関する具体のご提言も踏まえつつ、それらとあわせて、今月の11日でもございましたけれども、私のほうにもお届けをいただきました。その後、熊本の地震などもありまして私もちょっとばたばたしてしまいましたけれども、改めて私もこの1回目、2回目の調査を精査させていただきながら、また、今後の対策などご提言をいただいたものもしっかりと読ませていただく中で、再調査について考えてまいりました。この1回目、2回目の調査は、私は、第三者の専門の方々が非常に丁寧に全校の生徒さんへの可能な限りのアンケートやヒアリングも実施しながら行っていただいという意味では、大変きちんとした丁寧な調査であったというふうに受けとめております。亡くなられた生徒さんの保護者の方からも再調査については、今回の調査で十分理解をしたので、再調査を希望するものではないというお話もいただきました。それらを踏まえて私といたしましては、今回の事案については私の権限としての再調査は行わないということで決定をしたということでございます。

教育委員会のほうにもすでに伝えており、委員の皆様も既にご承知かと思いますが、改めて私自身の口から委員の皆様はこのことをお伝え申し上げたいということで冒頭

お話をさせていただきました。

それでは、本日の最初のテーマであります。そもそもいじめ以外の理由によっても、この年代の子供たちが、自ら死を選ぶということはこれまでもございました。そういう意味では非常に痛ましいことをごさいますして、いじめ防止に広く立ち向かっていくということに関連して、そもそも子供たちが自ら死を選ぶということについて、もう少し我々は深く考え、現状を把握し、対策を考えていく必要があるのではないかと、こういうようなことも考えまして、教育長とも少し意見交換をする中で、教育委員会としてもそういったことについてもまずは少し現状などを私にも教えていただいて皆様と議論を深めたいというふうに思ったところであります。

教育長のほうから資料の説明をお願いできますか。

○大越教育長 では、私のほうから配布資料の（１）から順番に、今市長からのご説明あった点と重複いたすかもしれませんが、概要についてまずおさらいという意味も込めて報告させていただきます。

まず１枚目、配布資料（１）の中学１年生自死事案、平成２６年９月事案ですね、おとしになります。その事案についての概要は皆様もうご存じでございますので、その対応経過、一昨年９月に発生した以降、その後、いじめ問題専門委員会で諮問、調査はしていただいていたんですが、この関係はご存じのように非公表の中で進めておりました。そして、昨年８月に公表いたしましたところでございますが、その後、学校名を伏せていたものですから、１０月５日に遺族のご了解を得て学校名も公表いたしました。改めて１０月に専門委員会に対して追加調査、いわゆる全校アンケート調査を行うことが可能となりましたものですからその追加調査の諮問をいたし、今年になりまして３月２４日に二次答申をいただくことができましたので、それを報告と公表という形でさせていただきました。その後、教育委員会内で再発防止等についても議論をいたし、今年４月１１日に正式に市長のほうにご報告いたしましたところでございます。

年度が変わりまして４月になりましたものですから、昨年大綱でのいろいろご議論も踏まえて、新年度予算、２８年度予算にこのいじめ対策を最優先課題としていろいろ計上させていただいております。その中で、今市長からもお話がありました、特にまずマンパワーの点では、いじめ対策担当教諭をまず全校に位置づけさせました。１９１校全部にいじめ対策担当教諭が必ずいると。その中で、今回事案が中学校で発生

いたしたということもありますので、中学校全校に専任教員を加配という形で増員をいたしました。厳密に言うと、そこに支援学校や中等学校もございますので65校になります。そしてさらに小学校、小学校百二十数校あるんですが、その中でも非常に注意を要するところが必要な学校、それに児童支援教員ということでこれも増員、加配をいたしまして、合わせますと約100人、小学校三十数人おりますので100人の増員を行ったところでございます。これで安心ということではございません。こういう増員を図った上で、学校内で組織的にちゃんと連携を図って、今まで以上に早期の対応、そういうことにしっかり当たっていただきたいという意味でございます。

その次はスクールカウンセラー、ソーシャルワーカー、この専門職の役割を充実強化していかなければならないということで、予算的にもスクールカウンセラーを2人教育委員会のほうに専任配置いたしました。また、ソーシャルワーカーは既に3人おりましたが、それに加えて2人追加しまして5人体制、合わせて7人の専門職を機動的に対応できるように今後しっかりといじめ・不登校対策支援チームという中に同行して学校への巡回も行うような予定でございます。もうこれは既に行っているところでございます。

話が前後しましたが、先ほどいじめ対策担当教諭、これは全191校におりますので、この教諭に対してやはりいじめの定義認識から始まってきっちり研修をしなければならないということで、去る4月13日に一斉研修をいたしたところでございます。また、昨日4月25日は校長を対象に、これも191校の校長を対象に自死予防の研修、いじめと限らず、自死があった場合の対応やそれに対する専門家の深い知識を教えていただきながら昨日研修を行ったところですが、非常にためになるお話をいただいて、すぐ学校で使えるようなノウハウが散りばめられていたなというふうに実感しております。

また、今後いじめ対策支援員ということで、警察OBや教員OBの方々もこういう支援員の形で今度小学校のほうに適宜入っていただいて、やはり多くの目で、各校、このいじめ対策を進めていきたいと思っております。

もろもろございますが、新年度、特にそういうような対応を今行っているところでございます。

その次に、配布資料の(2)に移ります。

残念ながら今年の2月にも自死事案が発生いたしました。今度こちらの事案でござい

ますが、この事案、2月4日に公表いたしましたところでございますが、翌日には臨時教育委員会を開催してご報告をいたしましたところでございますが、この点についてはもう全校アンケート調査がこれは必須ということで、アンケート調査を2月に開始いたし、その結果、大体の概要がまとまりましたものですから、それを3月末の24日に報告、公表いたしましたところでございます。また、翌、教育委員会においても報告させていただきました。

この関係については既に報道発表もいたしておりますが、なかなか特定するには我々としては難しいという判断もございましたので、これは軽々に判断することなく、やはりこれは専門委員会にしっかりと調査していただいて、その点について、アンケートの中でも多くのご意見が寄せられましたので、そこを十分今後分析した上で必要に応じて事情聴取もお願いすることになるかと思っておりますので、これは4月7日に諮問をいたしましたところでございます。これからいろいろ、数カ月の単位でこれは調査がかかるかと思っておりますので、その結果について待ちたいと思っておりますところでございます。

資料（3）もご説明させていただきます。

これは、仙台市のほうで毎年、標準学力検査とあわせて生活・学習状況調査というものをやっている中の設問と答えの中でちょっと気になる点をピックアップしたものでございます。

いわゆる児童生徒の自己肯定感、自分をどう評価しているかと、特に自分がいいところがあるという肯定な面の確認を毎年各学年ごとにやっているんですが、まずこの調査結果によりますと、学年進行、いわゆる学年が上がるごとにこの肯定感というのが右肩下がり減少していることがおわかりになるかと思っております。特に気になる点は、震災前の平成22年度の結果から、中1、中3を除いた学年では平均7ポイントほど低下したままで現在も回復していないということが、これはちょっと震災前と後の関係で影響もあるのかなというところも考えられます。

また、（2）のほうで、全国学力・学習状況調査、これは文科省のほうで行っている調査なんですが、その中でも同じような設問がございましたので、それを比較いたしてみますと、全国の平均と比べますと仙台は下回っているというのが出ております。ここら辺のデータの的なものからいろいろ今日は協議させていただくといいかなと思った資料でございます。

そして、裏面をお開きいただきたいと思いますが、もう一つの設問がございまして、

裏面のほうでは「自分の将来を考えると、楽しい気持ちになる」。普通は非常に希望に満ちた子供たちはそういうふうにも考えてもらいたいところなのですが、この結果も見ますとやはり低下傾向に学年進行とともにあるというようなどころがありますし、特に震災前の平成22年の黄緑の折れ線グラフと比べると、その後の、震災後の年次は下回っているという、これも先ほどと似たような傾向になりまして、自己肯定感と同様に、ある程度自分の将来をポジティブになかなか捉えられない、そういうようなものがデータのほうにもうかがえるのかなと。なかなかこれがどういう原因によるのかと、全て震災に起因するとも言いきれるものではないと思いますが、そういう中で残念ながら自死事案が発生しているというのも何らかの影響があるやなしや、そういうところも我々今後考えていかなければならないのかなと思っています。

私から説明は以上でございます。

○奥山市長 ありがとうございます。

配布資料の(3)のほうの、仙台市の児童生徒の、自己肯定感とよく言いますけれども、自分にいいところがあると思うという、自分のことを前向きに捉えるというような気持ちがどうも震災前よりも低い傾向にあるという教育長のお話でございました。

今回のいじめの事案に関する専門委員会の今後の対応に向けてのご意見の中にも、何か事案があったときに子供たちに適切に指導していくことはもちろんだけれども、そうした指導だけではいじめをなくすことができないという難しい側面もある。そうした中で、やはり自分にはよいところがあるというやわゆる自己肯定感を育てて、自分をきちんと評価し、そしてまた他者を受け入れる、そういう心の育ちを広い意味でつくっていかないといじめというのはなくすことができないので、しっかりその難しさを見据えて取り組んでほしいというコメントがあったように私は記憶しているんですけども、それらの難しさをまた改めて語りかけてくれるような数字でもあらうかなと思いました。

ただいま教育長から説明がありましたことなどを踏まえつつ、皆様からお気づきの点とか、これらについて例えばこういうポイントから考えてみたらどうなんだろうとか、忌憚のないところでまずは一回りご意見をいただければと思います。いかがでございましょうか、委員の先生方。もしよろければ、お手近にいらっしゃって恐縮ですが、吉田委員からでもよろしいでしょうか。

○吉田委員 ただいま教育長のほうからも話がありました配布資料(3)でございますけ

れども、確かに年齢とともに肯定感が下がっていくとか、それから震災後の関係とか、それから全国との比較とかということで、やはりこれもしっかりと受けとめて、いわゆる自分自身とそして自死との関係とかということは考えていかなければならないのかなと思う一方、ゆとりを持ったこの傾向の受けとめも大人として必要なのかなというふうに思っています。

と申しますのは、自分にはよいところがあると思うとか自分の将来を考えると楽しい気持ちになるのがだんだん学年とともに下降傾向にありますけれども、これはある意味、発達上、自然な現象なのかなというふうな読み取りができるだろうというふうに思っています。といいますのは、やはり成長するとともに、我々もそうなんですけれども、他人との比較ということがなされてきますと、やはり見えるのは人よりできない自分というところが見えてくる。そうすると、やはりそれが不安とか心配事になって将来に楽しい気持ちになれないというのがあらわれるのかなというふうに受けとめます。

ですから、この自己肯定感の解釈というのも、子供たち自身も含め我々大人もしっかりと定義づけまでいかななくても幅広く受けとめる。例えば、やはり自分はできないところがあるんだ、だからちょっと頑張ろうか。頑張ってもできない。じゃできないところがあってもできるところがあるんじゃないかと。一体何だろう。じゃそこにもう少し力を入れて伸ばしていこうじゃないかとかというような、いわゆる自分を発見していく、ある意味では確かな自己理解、そういうものも含めて自己肯定感と捉えたほうがいいのかなと思います。したがって、そういう広い解釈を持ちますと、私たち関わる大人は、短絡的な考えじゃなくて、息長く継続的にそういうことについての対応というのを考えていくのも一つなのかなということはこの資料を見ながら考えたところです。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。ただ右肩下がりでというふうに悲観的に捉えるだけではなく、ある程度はやはり物がわかって見えてきたからこそ下がってくる部分、それに対して多様な見方を我々大人がどう与えていけるか、その辺も多面的に見る必要があるというご意見かと思えます。ありがとうございます。

ほかにお話はいかがでしょうか。永広先生。

○永広委員 ただいまの吉田委員のご意見と関連することですけれども、実はこの仙台市の生活・学習状況調査にいろいろな項目がございます。この報告を受けたときに私が



1つ疑問に感じたのは、実は全ての子供たちが同じように、同じようにということではないですね、多分今吉田先生がおっしゃったように、全ての面で自己否定的な側面を持っているのかどうかということについては若干の疑問を感じたところです。

例えば設問で人の気持ちが変わる人間になりたいと思うという設問がありまして、これについては小学校5年生から中学校3年まで全てが90%以上の子供たちが「ある」と。しかも、この設問については高学年にいくに従ってわずかですけれどもパーセンテージが増えていて、中学校3年生が95%に達しています。人の役に立つ人間になりたいと思うという設問についてもほぼ同様で、高学年で95%が「ある」。物事を最後までやり遂げてうれしかったことがあるというのも90%から95%の範囲で全ての学年で高いパーセンテージを持っているというふうに、実は子供たちにはいろいろな側面があって、自分にはよいところがあると思うというのに否定的な子供がいる一方、しかしやはり人の役には立ちたいという側面を持っていて、子供たちも自分の評価が十分にはできていないのではないだろうか。

先ほど吉田委員がおっしゃったように、そういう子供たちが持っている多面的な側面を一つ一つきちんと洗い出して、いいところを拾い出していくというのが子供たちの自己肯定感を高めるという上でも重要であるし、今後のいじめ問題というようなことを長期的に考えていく上でも重要なのではないのかなと思います。

○奥山市長 ありがとうございます。ほかに何かご意見など。齋藤委員。

○齋藤委員 今、私もお二方の先生方のお話を聞いていて本当に同じことを考えました。

この自己肯定感は、やはり命の教育の尊さ、これにまさしくつながるものだと思います。今おっしゃったように、本当に子供たちは何が一体自分をわかってくれているんだろうということは多分誰もが悩む、そういう時期だと思います。今のこの世の中になかなか難しいということは、結局、小さなものにも命があるとかはかない命がある、だけれども、はかなくても小さくても一生懸命今を生きているとか、あとは、だんだん人は年を追って老いていく、それから弱っていく、そういうことなどを目の当たりにする機会がどのぐらいあるかということをやっと考えてしまいます。そういうことを目の当たりにしてきた子供たちというのは、やはりそこで多分自分が今生きているということの実感を感謝したり、それこそ思いやりを持ったりということがそこでやっとなされるのではないかと思います。

ただ、本当にこの現代社会はいろいろと難しい家庭環境もありますし社会問題もある

ので、そのあたり、家庭や学校が本当であればもう既にあなたは素晴らしい人だよということを多分いろいろなところで話はしていたと思うんですけども、それ以外にも、地域と融合していくことでやはり家庭や学校だけで得られなかった多くの大人に会う、先ほどおっしゃったように多くの人たちに会うということで、そこの中から、自分というものは、僕は、私は生きていていいんだ、それから私はこういうところで生かされているんだということを、多分そこで初めて自己肯定感が生まれてくると思うし、いろいろなそういう窓口があったほうがいいのかということを感じます。必ず自分を必要としている人がいるんだという気持ちをぜひ、一番心のひだのある小学、中学、高校、そのぐらいの子供たちに周りの大人から得てほしいと思っています。

ちょっと1つ気になっているのはインターネットで、今回九州の地震でインターネットは非常に情報収集とかでは役立った。だけれども、これは時として、特にいじめや自死についてなどは非常に情報が氾濫して、ITにとらわれて身動きができなくなってしまった状態になっていることを非常に危惧しました。そのあたりを、その危険性を大人は十分に理解をして、子供に対してはその活用のよしあしを伝えていくべきではないかということも1つ付け加えさせていただきます。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。子供たちのいろいろなものに対する見方や受けとめ方を多面化していくというのが大人の大きな役割であったり、また教育のプロセスの中で大事なことだというのは多分異論がないところだと思いますけれども、それを誰がどういうふうにやっていくのか。学校でできること、また家庭でできること。いろいろあるかと思いますが、私も親として今振り返ってみますと、どうも子供のいいところを褒める、褒めることは大事だと理屈ではわかっている、目の前にいる子供を見ると、できないことばかりを叱っていたように思います。そうすると齋藤委員のおっしゃるように、やはり親というのは子供に対してないものねだりをする傾向が強いので、あるいは地域の方であるとか、あるいは児童館で一緒に過ごす子供のよその子のお母さんとかお父さんであるとか、いろいろな親以外、学校以外の関係というのも重要になってくるというふうに思いますね。

ほかにご意見ございませんでしょうか。今野委員、お願いします。

○今野委員 学年を追うごとに自己肯定感、将来への期待感が下がるということは、時代の背景の中で高度成長から低成長あるいはマイナスになっていっている中で、親の世代よりも自分たちの世代がもっといい、いろいろな意味でいい人生が送れるというこ

とに対してなかなか希望が持てなくなっている可能性はあるかと思いますが、それよりも実際には大事なものは、例えば心の根っこといいますか、愛国心、例えば自分が生まれた国に誇りが持てるかどうかであるとか、あるいは郷土愛、あるいはご両親へ感謝する気持ちが持てるかどうかというようなことが心の根っこで、それが特に直接的に関係あるかなというのが道徳教育かと思ひまして、私、小学校1年から中学校3年生までの道徳の教材をお借りいたしまして目を通していただきました。非常に、教育上、長い文章はなくて、二、三ページぐらいの文章が多いんですけども、よくあそこまで感動的な、ちょっと涙を誘うような文章がたくさん集められたというような感じの内容でございまして、子供が素直に感謝の心を持って読んだらいい影響がありそうだなというふうな感じで読ませていただきました。

それと被災地ならではのということでは、小学生向けの防災教育副読本、これも、被災の教訓や記憶を語り継ぎ、防災への意識を高めるだけではなくて、被災地の人々がとった行動が世界の称賛を得られるようなものであったと。まさに地域愛であるとか日本人の誇りも感じられるような内容がありましたので、これの使い方も非常に重要になってくるかなというふうに感じました。以上でございます。

○奥山市長 ありがとうございます。道徳の教科化というのもまたこれは別の大きな課題でありますので、またいずれはそういったことも話し合いの俎上に上げる機会もあるかと思ひます。ありがとうございます。

続いていかがでございましょうか。

○加藤委員 配布資料(3)の自己肯定感のことに少し戻るんですけども、学年とともにこれが下がっていくということは、これまで委員の皆様がいろいろお話しになったとおり、やはり発達、大人に向かっていろいろ自己とか自我というものが現実的に見られるようになってきたり、他者の目がとても気になるという中で、自分の悪いところのほうに気がなっていくというような時期を迎えているということで下がってくるのはあり得るだろうと思ひます。

ただ、もう一方の震災前と比べたときの差については、ちょっとこれだけでは何とも言いにくいんですが、それをちょっと考えてみるに、大人もみんな無力感の中にいた時期でしたし、できることというのがなかなか現実的に捉えられなかった、全体的に東北というのが痛みを負った時期でしたので、できればここからまた少し時間を持って見ていければいいのかなというふうに思ひます。

特に、先ほどの話に戻りますが、中学生などは自分のよいところをみんなの前で言うというのはとても苦手で、それはちょっと自慢のように思われてしまうのではないかと、大人もそうですけれども、なかなか言いにくいところがあります。先ほど市長がおっしゃったように、周りの者がその子の強みというのを探してあげる、そして気づいて伝えてあげる。ちょっと照れながらも、ああそういうふうに見られているのかなと子供たちが感じていくという、そういう些細なところから取り組んでいけることかなというふうに思いました。

○奥山市長 ありがとうございます。震災前との比較というのはなかなかこれだけでは何とも本当にわからないところはあるんですが、しかしいろいろな面から、今お話をいただいた社会全体の震災後の雰囲気であったりということもあるかもしれないし、また、いろいろ親世代が営々として築いてきたものが、1回の自然現象によって数十年のものが壊滅するというのを見たことの影響なのかもしれないし、その深い意味というのは私もちょっとわかりかねるところはありますが、しかし、こういうふうに数字上も出ている一つの我々として重要な兆候なんだろうと思いますので、それらについてできる限り多くの知見やご意見をいただく中で、私としても、震災後の仙台の本当の意味での、よく心の復興ということを言うのですが、どうすると子供たちの未来に向けた心の復興ということになるのかどうか、重ねていろいろな調査とか知見もいただきながら、考えてまいりたいと思います。

ほかにご意見、草刈委員、いかがでしょうか。

○草刈委員 先ほど市長もどうしても子供に厳しく接してしまうというお話がありましたけれども、先ほどの自己肯定感についてですけれども、日本人というのは昔から謙遜をする特性があるということで、親御さんがよく「うちの子供はどうしようもなく」というふうな表現を子供さんの目の前でおっしゃるようなことをよく見かけられますけれども、実は私は幼いころそれで大変傷ついた記憶があります。後に親に確認したところ、親はそんなことを言った覚えも、言ったことも覚えていないということなんです。やはりたとえ謙遜であっても、それを理解できないぐらいの年ごろの子供の前ではやはり言うてはいけないのではないかと、私を私は自分の経験から感じておりました。そういったほんの些細な言動が子供たちの自己肯定感に影響するということをやはり周りの大人がきちんと知ってほしいという思いがあります。

それから、いじめの場合だけでなく、思春期などには、先生方もお話がありました

が、さまざまな悩みを抱える時期でもあります。そんなときに気兼ねなく心を吐き出せる場所がきちんとあるということを常に子供たちにも教えていただきたいと思えます。

それとともに、親ではやはり気づけない学校内の悩みについてはどうしても先生に聞いていただきたいという思いがあります。例えば毎日の学習・生活記録ノートのやりとりでも、先生のコメント一つでとても喜んだりするお子さんがいらっしゃいますので、そういったたった一言のやりとりで先生と1対1のつながりが日々できるという安心感があるというふうに捉えております。何かのときにはやはり先生に相談してみようという意識につながって、それをキャッチすることのできる先生方だということも信じております。

私はこれまで小中学校で多くの授業を拝見してきました。そのときに、どの先生もどの子供たちも、道徳授業に限らず全ての授業の中で自然に相手を思いやりたり尊重するという姿勢が見えました。緊張する先生を和ませようとして子供たちが必死に答えようとする姿がほほえましかったり、支援を要するお子さんのお手伝いや気配りなど、普通の授業の中でもこれだけのことを教えてくださる先生方が仙台市内にはたくさんいらっしゃることもわかりました。こうした先生自身も気づかずに自然に子供の心を育ててくださっていることにぜひどうぞ自信を持っていただいて、今後さらにこのつながりを深く固いものにしていただきたいというふうに思っております。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。児童生徒と先生の間信頼関係というのはいろいろな場面で育っていくんでしょうけれども、やはり先生の一言というのはとても大きいですね、本当に。例えば、昔はよく日記みたいなものとか感想文とかいろいろな調査の宿題などを出して、花丸や桜の「よくできました」とかというのがポンと押して返ってくる。でも、たまにそこに一言「よくやったね」とか「今回は頑張ったね」とか書いてあるだけでも何かもう、私なんかおだてにのりやすかったせいか、非常に励まされたというか、「あ、頑張らなきゃ」とさらに思ったというか、そういうことがありました。そうした細かな日々のやりとりを通して信頼関係を構築していくということもとても大事でしょうね。ありがとうございます。

教育長のほうからは。

○大越教育長 今皆さんのお話を聞いていてなお共通するものを感じたものですから、ちょっと述べさせていただきます。

昨日ちょうど、先ほどの自死予防の研修があったというところで、そこで最後に、先生が自死予防で「孤立」というのがキーワードだとおっしゃられたんですね。今回の一昨年の事案も、二次答申でもありましたけれども、周りがその子が非常に心を痛めているところに残念ながら気づかなかったと。気づかなかったことがその子供の孤立を深めることになったのかなと、思えました。そして、その孤立をどう早く気づいてやるかということが大事だと。昨日の先生のお話で「気づき」と「きずな」が自死予防の大事な点だというふうにもおっしゃられていました。

先ほどお話があったように、気づきというところにまずみんなの目がいくようなふうになって、そして、かつ周りでその子をプラス評価してあげるというところがもしあれば、いろいろな意味で自己肯定感が落ち込まずに少しは上がっていく要素にもなるのかな。そうするとやはり、先ほどもありましたけれども、日本人の一見美德のようで、評価しないことがあります。やはり学年が上がるほどに現実を知ることによって落ち込みやすくなっているときには、励ましてやるとかプラスの評価をしてあげる、それを先生も周りも意識できるような環境になってくる。そうすると、私が言いたいのは、これは学校だけでなかなか完結は難しいと思っております。やはり家庭、震災後特に大人の人たちは忙しい状況の中で子供に目が行き届かなくなっているかもしれませんが、やはり家庭にいる時間が恐らく半分以上だと思いますので、1年間のうち。やはり保護者の方も子供の気づきを持つことで、そして子供をプラス評価してやると、きずなが生まれていくのかなというふうに感じました。ですので、昨日の研修の成果が非常にズシンと感じるところでございます。

そういう意味では、もっともっと不安定な発達段階の子供に対しては、決してプラス評価することは甘やかすことだけではないと思うんですね。正当な評価をもっともっと加えてやるべきだなと。それによって自死予防につながるようになることが、それが急がば回れのもしかしたら近道なのかなというふうにも感じたところです。

○奥山市長 ありがとうございます。2つの気づきときずなというキーワード、大変頭に覚えやすいキーワードで、特に気づいた人というのは、今回の2回目のご報告書でも、確かに大変苦しんでいらしかった当該の生徒さんのお友達というか同級生の何人かはその気づきを持っておりました。彼が非常に気持ちの上で苦しいところに直面しているということを自分は気がついてたというようなコメントもアンケートの中にありましたし。ただ、一方でその気づきを、先生とか学校全体につないで、それこ

そきずなのようにつなげていくというバトンがやはり今回はどこにもつながらないままに、大変難しい残念なことになってしまったということでもありますから、誰であれ気づく立場にいる人を増やしていくこととか、気づいたものをしっかり差し出すことや気づいたものを受け取ること。そうしたことに我々はもっといろいろな意味できめ細かくなければいけないのかなというふうにも思ったところです。

ひとあたり今さまざまな観点からお話をいただきました。地域のこと、また震災後のこの仙台の特有の社会状況があるのではないかということ、また気づきのことや、また道徳の教育やいろいろな、例えば防災のときに子供たちがやった積極的な活動の載っている防災教育副読本による評価であるとか、いろいろ生かすべきことについてもお話をいただいたと思います。ありがとうございます。

今一巡してお話をいただきましたけれども、それぞれの委員の皆様の話を伺って、そういえばちょっとこういうことを思いついたとか、関連して少しここをコメントしておきたいというようなことがございましたらお手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。吉田委員、お願いします。

○吉田委員 先ほど教育長のほうから孤立という言葉が出ました。大切なキーワードかなと思っております。そこで、やはり自死に対する我々の対応策という部分を常に考えていかなければならないんですけれども、秋田県では自死に対する対応に積極的に取り組んでいるということは皆さんもご承知のことかなと思いますけれども、秋田ふきのとう県民運動というのがございまして、その中で相談ホットラインパンフレットというのがあります。その中のキャッチフレーズといいますか、そこに「誰かに話そう！誰かと悩もう！一人で悩まないで相談しよう」という言葉がございました。このような際、やはり相談相手というのはこのような機関であれば他人との関わりというふうになりますので、これも日々人と人とのつながりという背景があってこそ相談もスムーズにできるのかなと思うんですが、もしかして日々他人との関わりが持てるような人は、このような公的機関へ相談の前に、誰かにもう話をして悩みを打ち明けているんじゃないかなと思っています。そのようなことを考えますと、やはり子供たちには、自己肯定感も含め、日々の教育活動の中でさまざまな人間関係について学び合うという機会を設けていくということが非常に大切になっているのかなというふうにご考えております。

具体的に申し上げますと、いつも同じことを繰り返しております、申しわけございませ

ん。いじめとかそれから自死への防止対策としての直接的ないわゆる指導ということももちろん大切にしながらも、日々の教育活動の中で、先ほど申し上げましたように、自己理解とか他者理解ということを地道に続けていくことが非常に大切なのかなと思っております。先ほど草刈委員のほうから授業の中で互いに尊重し合う光景が見られた。非常に大切だなと思っております。ある方が、教科指導のプロである前に、人間関係づくりのプロであれ、教師はというようなことを言っております。したがって、部活動とか授業の中の教科指導を通してでもそういうような人間関係づくりというのは十分にできるんじゃないかなと。日々繰り返すことによってそういうことが定着されるのかなと思っておりますので、やはり我々は意識していかなければならないのかなと考えております。

○奥山市長 ありがとうございます。私なんか親として子供が小学校の低学年のうち、やはり学校になじめるかな、今まで保育所にいたし、同じクラスに保育所で同じだった子供はいないから、うちの子だけは友達なしでいきなり4月から学校入るし大丈夫かな、先生、うまく子供たちの人間関係をつくってくればいいなんて、そういうことを気にしながら授業参観などに行きましたけれども、だんだん中学校とかになると、子供もある程度なれていることだし、それよりも、もうそろそろ受験だから今度はちゃんと学校のほうで成績上げてもらわなきゃとかといって、だんだん親のほうの子供の人間関係づくりを勝手に親の心から卒業させてしまいます。学校にまるで学力養成機関みたいなことを期待するといったこともちゃっかりと親は考えていたりするんですけども、やはり改めて、子供が幾つになっても、心というものをきちんと育てていかなければいけないと思います。意外と親は子供が元気で育っていると思込んでしまうと大事なことを忘れてしまうものかなと思いつつ、只今のお話を拝聴いたしました。

ほかに何か。加藤先生。

○加藤委員 誰しも親は子供のためにと思っていると思うのですが、子供たちの問題というのは、大人から見ると意外に些細なことに思えてしまったり、そのぐらい大したことないというふうに言ってしまうようなことであっても、子供の世界の中ではとても大きな問題になっていたり、また、空間がとても狭いので逃げ場がなくなっていたりというような重いことになっていくということがあります。なので、やはり大人は10年前、20年前を思い出しながら、実はあそこほんのちょっとした、前



髪を数センチ切り過ぎたことですごく気になって学校行きたくなかったとか、そうした些細なことを思い出して、子どもにとってはそれがとても大きなことになっているということを受けとめてあげるということも重要なことかなというふうに思いました。

もう一つ、褒め方なんですけれども、つい我々というのは目標を立ててそれに頑張る姿というのが尊いものだととても思うので、一旦褒めるんですけれども、でも次までこれは頑張ろうねと次の課題を与えてしまいがち。そうすると子供のほうは、褒められたことよりも、その後注意されたことのほうが大きくなっていきます。やはりきっちり褒めるということが意外に大事なことかなというふうに今感想を持ちました。

○奥山市長 ありがとうございます。子供たちの世界は空間的に狭くて逃げ場がなくなるという点は、大人が忘れがちなところかもしれませんね。大人は、例えば何かあっても職場は職場で別に家庭があったり、家庭で何かあっても趣味の世界があったり、また、私などのように、ええい気晴らしだとかとって買い物してみたりとか、いろいろな気持ちをそらす方法というのを無意識のうちに持っていたりしますけれども、子供にとってはやはり、例えば学校なら学校の生活が本当に大きなボリューム、全てと言っていいようなものを持っているというのを忘れがちになるかもしれないですね。ありがとうございます。

ほかに何かお気づきの点ございませんでしょうか。齋藤委員、どうぞ。

○齋藤委員 今加藤委員のお話も聞きながら、ああ本当にそうだなと思っておりました。先ほど震災のときに自己肯定感が落ち込んだということがありましたが、私たちが振り返って一番心が動く中学時代とかを思い出すと、多分ここにいらっしゃる全ての方が、恥ずかしい思いをしたりとか、あと人には言えない悩みを持ったりとか、必ずみんなが持っていること、それをやはり私たちも隠すのではなく、それを子供と一緒に、何ていうんですか、同調して共感してという気持ちが非常に大事だなということを今感じました。

そういう一番大事な時期に、大変な時期に教員を目指していらっしゃる方や先生方を、私は本当に素晴らしいと思います。いじめを撲滅しなくてはいけないのはもちろんですけれども、やはりなかなかいじめは撲滅し切れるものでもないし、今言ったようにいろいろな心のひだがあることを、子供の立場、いじめられている子の立場、それからもしかしていじめている側の子にもいろいろな要因があるんだというあたりをやは

り私たち大人は受けとめるべきだと思います。そして、教員の仕事はすばらしい、自分たちのやっていることが学校教育を支えている、子供たちの人間形成をつくる場なんだということを、場をつくっているんだということを、草刈委員もおっしゃったように教員の皆様方は強く誇りに思い、これからも前に進んでいただきたいと思います。

それに対してやはり家庭も地域も一緒になって努力すべきことがあると思います。子供たちは大人の姿を一番見ているということを、親であり、それから先生でも、もちろん地域もそれを受け止めなくてはいけないと感じました。よく虐待をされている子供が、どんなに傷を負っていても、絶対お母さんは悪くないとかお父さんではないと言い切るということを聞きますけれども、本当に子供は親を愛しています。その部分をやはりいま一度、親の愛情、それから先生の愛情、それから地域もみんなであなたたちを愛情で包んでいるんだよという気持ちを、子どもたちに伝えることの大切さを感じました。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。ほかに何かございますでしょうか。特によろしくございますか。

いろいろ貴重なご意見ありがとうございました。いじめの防止、また自死の予防ということにつきまして、今予算の中で事業として進めている点は諸々ございますけれども、今日いただいたような心を育てるとか視野を広げるとか、また、今加藤委員からお話があったような子供の世界と大人の世界の違いを大人の側がしっかりわかっていくとか、どうも褒めることと何か目標達成とをバーターのようにしてしまう親特有の傾向であるとか、そういったものについてもやはり我々は広くこれを理解して、PTAの皆さんなどと一緒になりながら、例えば市長部局のほうのいろいろな事業の中でも、そうした広く市民の皆さんに、親と子の間の心の持ちようの問題とか、昔でいえば家庭教育に関する講座とかふれあい学級とかいろいろありましたけれども、そういった学びの場、大人に対しての学びの場というのも充実していくというのも教育委員会だけでなく市長部局も取り組むべきことだと思いますので、生かさせていただきたいと思います。大変ありがとうございました。

引き続き、いじめ、不登校、また自死に関連しては今年度も継続的に議題とさせていただきながら我々の知見、対策を深めていきたいと思いますので、よろしくお願いをしたいと存じます。

(2) 平成28年度教育委員会の主要事業について

○奥山市長 それでは、議事の2番目のほうに入らせていただきたいと思います。平成28年度の教育委員会の主要事業についてということで、この件につきましては昨年の秋に予算要求の時点においていろいろご意見を賜りました。特に教育委員会と関連の深い子供未来局のさまざまな事業、放課後の児童クラブの問題であるとか、そういったことも含めてご意見をいただいたところではありますが、まずは平成28年度の教育委員会の主要事業の概況についてお話をいただいて、それからまた少し議論をさせていただければと思います。教育長からお願いします。

○大越教育長 では、私からまた資料に沿って概要を説明させていただきます。配布資料の(4)でございます。

こちらの1ページ目を見ていただきますと、ご案内のとおり昨年末に教育大綱が市長のもとで策定されて、それを踏まえて今年度の主要事業をある程度構成されているところでございます。その中で1ページ目は、もうご案内のとおりいじめ撲滅に向けた施策の総合的な推進ということで、いじめ対策の部分を集約した形で、大きく4点を柱立てして各項目を記載いたしております。一つ一つの説明は省略させていただきます。先ほどの説明とほぼ重複するところでございます。そういう中で、新規や拡充、そういうところがそれぞれ入っておりますので、この点につきましては、まず今年度、今スタートして、当然これはある程度評価・検証もしていかなければならないと思っております。また、1年ですぐ結果が出るような簡単なものでもないと思っておりますので、これは実績を積み重ねて、また次年度以降にどのような修正をしたらいいのかも検討していきたいと思っておりますので、その次のページに入らせていただきます。

その次のページは、ここにも学力・体力の向上や云々というところが入っておりますが、その中で1つ新規の部分で挙げさせていただくのが、丸の4つ目のところに「ハンディや問題を抱えている子どもへの対応の充実」と、いわゆる特別支援教育の分野でございますが、その中で白い星印1つついているのが特別支援教育介助員配置事業という事業、これは今年度の新規事業でございます。これは、通常の学級において在籍しているお子さんで肢体不自由のあるお子さん、特別支援学級ではございません、通常の学級、ただ、車椅子等を使ってどうしても日常生活が自分一人でなかなか難しいと。これが今までどうしても保護者頼みのようなところがあって、やはり通常学級

で1日いるというのは相当時間が拘束されまして、保護者負担も大きいものがあったところですが。通常学級ではほかの発達障害のお子さんには補助員がつくなどの事業は先行して行っているところなんです、ちょうどすき間のような形でこの部分がなかなか対応できていなかったということで、今回介助員を配置することができましたので、人数的にはまだ数人レベルではございますが、やはり同じような、特別支援学級だろうが通常学級だろうが、ハンディを持っていらっしゃるお子さんには可能な限り対応してまいりたいというところで、新規に1つこれが入っているところがございます。

もう一つ、同じ欄に黒星印でついているのが学校給食センター対象校アレルギー対応拡充事業。これはもう数年来いろいろご要望もあったところですが、学校給食センターのお子さんのアレルギー対応というのが、どうしてもキャパの問題やら施設の制限がかかっていることから実は対応できない空白の部分がありました。今回8月に（仮）南吉成学校給食センターの開業を今控えているところがございますが、この学校給食センターができることで、給食センター全体、仙台市内の全体的アレルギー対応の再編を行うことができます。そのことで食物アレルギー対応の食の提供が10月以降拡充することが可能となります。そういうことで、単独調理校も含めて市内のアレルギー対応のお子さんに可能な限り対応食の提供が広がるということが可能となります。子供さん自体は全体的に少子化で減ってはいるものの、食物アレルギーのお子さんは明らかに増えているんですね。ここ10年以上ですと恐らく1,000人、2,000人単位で、全く逆ですね、右肩上がりが増えていて。これは原因がなかなかわかりません。いろいろな環境的なこともあるのかもしれませんが、事実、ただ子供さんがアレルギーになっていることは確かですので、家庭での食事はもちろんなんです、学校という9年間の義務教育の中でアレルギー対応で子供さんたちがそこでまたハンディを負わないように、できるだけそこはカバーできるような形で今拡充が見込める段階になりました。

その次、3ページ目のところで新規の星印、真ん中に、文化・芸術活動を通した学びや交流の機会の支援という項目の中にせんだい・アート・ノード・プロジェクト事業というのが新しくできてございます。これは、地域にアーティストが滞在して作品を制作する、いわゆるアーティスト・イン・レジデンスという表現がございまして、カタカナなので、まちの魅力と人々の活気を引き出すアート事業というふうにかえてもいいかと思えます。滞在型のアーティストと交流しながら、その制作過程も含め

てそれがアートそのものというような、ある意味で新規の試み、実験的な試みになるかもしれませんが、これを市民とともに実施していくと。全国レベルでは既に先進的にやっていたところもあるんですが、今度仙台は仙台バージョンで、今後これがある意味でわくわくドキドキするような事業に展開していくような、ある意味で化けていくような、そういうふうなものをつくり上げていきたいというところで、これは結果としては人づくりにつながっていくのかなと、社会教育全般の事業に資するのかなというふうに理解しているところでございますので、これも非常に推進していきたい事業の一つでございます。

その次が4ページ目でございます。4ページ目に黒星印で真ん中に学校トイレ改修・洋式化推進事業というのがございます。これは、学校自体、洋式、和式トイレありますが、和式が圧倒的に多いんですね。その中で洋式の整備率というのが、大体小中学校ともに校舎でいうと20%台だったかと思うんですが、これを今後50%をまず目標にしていこうと思っているところでございます。震災後、どうしても校舎関係は復旧のほうに力点を置いていたものですから、こういう学校の環境整備、いわゆる子供たちがトイレを忌避するというか敬遠するようなことのないような形で、やはり洋式で、一般家庭が洋式化が当然進んでおりますので、そこをもっと充実していきたいというところです。ただ、これは全部の学校に一気に進むわけにはいきませんので、これは計画的に年次的に進めていきたいと思っているところでございまして、やはりこれは5年10年、少なくとも10年はかかる事業になろうかと思えます。ただ、やはり一步一步進んでいくと、いずれ学校が随分イメージが変わったなというふうにしていきたいなと思っているところでございます。

あわせて屋内運動場、屋内運動場はいわゆる避難所にもなるわけでございますので、そちらのほうのひろびろトイレの増設や洋式化と、これも課題でございます。これもあわせて取り組んでいきたいと思えます。今、熊本でも衛生問題というのが非常に深刻な問題になっております。トイレが立派でももちろん水が流通しなければということもありますけれども、やはりいつ来ても、いつ震災が起こるかわからないわけですから、やはりトイレの問題はすぐ迫ってくるんですね。それと食料問題だと思えますが、食料問題はある程度備蓄で当面对応していくということで、これは計画的にやっておりますが、トイレの問題は一気に解決するわけじゃありませんので、やはり地道にこの環境改善も取り組んでいきたいと思っているところでございます。そういう意

味では、震災後の防災対策というのは飛躍的に充実はされておりますが、学校も全く重なる部分がございますので、今後この点にも力を入れていきたいと思っております。私からは以上でございます。

○奥山市長 ありがとうございます。なかなか教育委員会のご要望全てに応えられるような予算措置ができたわけではないとは思いますが、私としてもこれは大事だと思う点については、意を用いてつけさせていただいたところではございます。

今教育長からもお話がありましたけれども、アレルギー対応は本当に時間がかかっていまして、私が教育長をさせていただいていたころから、足かけ恐らく9年ぐらいかかって多分今回ほぼ完全実施ということになってきたかと思っております。大変長い間お待たせをしてしまったんですが、また一方で、不注意にアレルギー対応食をきちんと分けられないところをつくって事故などが起きると大変なことになりますので、そういうことのないようにということで施設面の拡充を進めてきたわけです。10月以降、子供たちが少しでも安心して給食を、先ほどの話ではないですが、仲間づくりやお互いの信頼をつくれる、食を通しての楽しい時間につながってくればよいなというふうに私も思います。

それでは、いろいろな予算案が出ておりますけれども、これらの事業に関連して少し委員の皆様のご意見、また場合によってはご質問でも結構でございます、お受けをしていきたいと思っておりますが、どなたかいかがでございますでしょうか。永広先生はいかがでございますでしょうか。

○永広委員 それでは、まず最初にいじめ問題についてですが、最初に教育長からご報告ありましたように、今年度はさまざまな新たな施策を盛り込んでいただきました。大きいものとしては中学校等へのいじめ対策専任教諭の配置、小学校への児童支援教諭の配置がございます。そのほかカウンセラー等々についてもかなり多数の配置をいただきました。これも先ほど報告がありましたように、新年度に入ってこの対策教諭の講習会あるいは校長を対象とした講習会も既に開かれていて、着々と施策は進められていることと思っております。

ただ、その中でちょっとだけ気になりましたのは、一部の意見の中で、いろいろなノウハウが提起されているけれどもそのノウハウに新規性が余りないと、これまで言われてきたところと余り変わらないというようなのが、ある意味やや否定的な意味合いで意見として出てきていたというのを見たことがございます。ただ、これは私が考える

には当然といたしますか、施策についてはこれまで1年以上にわたって教育委員会でも議論をし、いろいろな方の意見も伺って、考えられる手だては全て表に出してやれるところからやってきているというような状況にあるので、今年度に入って何か目新しい特効薬が突然出てくるというようなことはあり得ないと思います。

ただ、違うのは先ほど言った専任の教諭が配置されてマンパワーがきちんと置かれたということです。しかし、これについてもやはり注意しなければいけないのは、その専任教諭が決してスーパーマンではないと。専任教諭が置かれたから何でもできるわけではなくて、やはり対応、子供たちと接するのは一人一人の教員ですし、あるいは保護者の皆様、地域の方々であって、その方々が子供たちが発するわずかなSOSのサインを見逃さないようにするというのは、やはりこれがいじめの発見のスタート、第一歩ですし、それらをくみ上げて系統的な組織的な、そして継続的な取り組みを行うというのがやはり大事であって、専任教諭とかあるいは学校長はそれらをきちんとコーディネートする立場にある。しかし、そのコーディネーターもやはりそれ以外の外の方々の援助がなければ有効には働かないと思いますので、そのコーディネーターたる専任教諭をいかに活用するか、それはやはり学校長の役割も極めて大きいのかなと思うんですが、全体を俯瞰できる立場にいる方がコーディネーターをいかに有効に動かすか。従来言われている当たり前のことを地道に一つ一つこなしていくということが基本的に大切であって、今年度上げられているこのいろいろな諸策も相互に関連づけて行われる必要があるのかなと思います。

○奥山市長 ありがとうございます。学校という一つの組織の中でさまざまな施策が系統的に継続的にということ、それがご指摘の大きな部分として私も本当にそのとおりだなと、恐らく組織の持つ力というのはそういうところにあるんだろうというふうに思います。ありがとうございます。

ほかに何かお気づきの点など。加藤委員。加藤委員の後、今野委員でよろしいでしょうか。

○加藤委員 続いてやはりいじめのことでなんですけれども、いじりとかからかいとか非常に広い意味でいじめというものをこれから捉えていくときに、それはどこにでも起こり得るということが今回非常に強く我々の中で理解できたことでした。子供たちが今後何かおかしいとかいつもと違うというようなことがわかったとき、それは今気づけてよかったと思えるような学校になってほしいなというふうに思います。対

応に当たっても、大人や教師は、子供同士が人間関係を学んでいくための仲介者、媒介者として、関係する生徒たちに向けて、よく話してくれたね、よく気づいてくれたね、よく考えてくれたねといったように褒めてあげられるぐらいの気持ちで人間関係力を育成していくということを期待しているところです。

また、先ほど今後は効果検討・検証、それから評価が課題になってくるというお話がありました。指標をどういうふうに読みとっていくのかということがとても難しいことかなと思っています。例えば今後もアンケートはあるでしょうが、例えば複数、何件上がりましたといったとき、それははじめのあるよくない学校だというふうに簡単に決めてしまうのではなく、子供たちの仲間関係の教育に熱心に取り組んでいる、そういう動きを今見せている学校だという見方も我々社会が一つ持つておかなければいけないのかなというふうに思っています。

結局はじめの取り組みというのは、監視をしていく、そういう動きというよりは、その根底に、やはり学校で行われることです。ですから教育であり発達支援、これから大人になってコミュニケーション力を高めていく子供たちの発達支援であるということをぜひ確認しておきたいなというふうに思っています。

○奥山市長 ありがとうございます。評価ということになるとどうしても数字ということになって、その数字というのがひとり歩きをした場合に、せっかく先ほどからのお話でいうとよく気づいてよく出してくれたものを、逆の意味にこんなにあるのかとって仮に私が叱ってしまう、市長から叱られたとかそういうことになると、何のための気づきであり、何のための気づきの受け渡しなのかということが見えなくなるという話であります。本当に監視ではなくやはり子供たちにとっての発達を支援するという、そのことについてお話をいただきました。ありがとうございます。

今野委員、すみません、お待たせをいたしました。

○今野委員 私もいじめ問題についてでございますけれども、この会合に参加させていただいて、何となくいじめがあったかの調査に終始して対策についての検討が少ないような印象が実はありました。ただ、教育委員会でまとめられた対策の全容が見えるようになってみますと、大変な予算をとって人的にも投入されて、本当によくここまであらゆる面についてやられるなというような感じを受けておりますけれども、何分にも自死問題について、昨日の高橋祥友先生のお話の中では国全体の中のいじめられた原因のうち60%は原因がわからないと。しかも、そのうちのいじめであるというふ



うに認定されたものが本当の数%しかない。しかも、非常に複合的なことによって自死が起きているというお話がございましたけれども、そういう意味では、いじめだけを解決しようとしてもなかなか全体の自死問題を解決するということにはある意味ならないのかなということを実は感じました。

そういう意味でも、これだけの予算をとっていじめ対策をされる中で、原因がいろいろなところにあるという認識はもちろん皆さんお持ちなんですけれども、学校教育としてなかなか立ち入れない分野もあろうかと思えますけれども、できるだけ子供、親、地域、学校の中の先生同士の連携を大切にして、この対策を現場でよりよい方向に具体的な方法を早くつくり上げていただいて、いい結果に結びつくようにしていただければ大変にありがたいというふうに思います。以上でございます。

○奥山市長 ありがとうございます。図らずもこちら、右側の委員の方々にお話をいただきました、次に左側の皆様。草刈委員はいかがでございますか。

○草刈委員 今、永広先生ですとか加藤委員がおっしゃったように、やはり専任教諭が関わってくださるということは大変ありがたいことなんですけれども、そこに比重がかかり過ぎてしまうということは絶対あってはならないことだと思います。特にお話を伺って思いましたことは、やはりそれを検証して結果を出すための施策であっては決してならないと思うし、例えば数字で結果が出たとしても、以前のように解決したのが何件ですとかいじめの件数が何件ですとか、そういった数字だけであらわせないものがたくさんあると思いますので、それをどうやって皆様にわかるような形でお示しいただくかということがとても重要なことだと思いますので、その点について今後検証していただきたいというふうに思いました。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。数字だけではあらわせないものをどう我々が受けとめていくかということですね。

あといかがでございますでしょうか。吉田委員よろしいですか。

○吉田委員 やや総論的な物の言い方になりますけれども、先ほど加藤委員のほうから社会という言葉が出ました。それから今野委員からも連携という言葉が出ましたけれども、今回のこのいじめ撲滅に向けた基本方針1にのっとり事業編成ということは、我々としてはいじめを絶対に起こさないというような気持ちを込めた事業立ち上げですから、やはり実践の上においてはしっかりと効果があるもの、実効性のあるものにしていかなければならないのかなと思っております。

そこで留意しなければならないことは、基本方針1の事業だけがはじめ撲滅とか自死に関わることでなくて、そのほかの7つの基本方針がございますよね。それらを充実させる、そのことによって市民力の育成のための社会教育の充実、もちろん学校教育の充実もあります。そういうものを確かに実践することによって、いわゆる子供の健全な成長、あわせて市民の良識ある意識の向上が促せるのではないかなど。そのことがひいてははじめ撲滅、自死防止に結びついていくものと考えているところです。それはなぜかといいますと、先ほど秋田県の例を挙げましたけれども、秋田の自死率が減少しているんですね。その対策の全体のコンセンサスが自死予防をみんなでやっていくというところにあるというふうに伺っています。したがって、繰り返しになってしまいますけれども、子供と子供、子供と大人、大人と大人、いわゆる市民同士ですね、そういう人とのつながりがしっかりなされるような仙台市の教育というものを今後充実させていく必要があるのではないかなど思っております。

したがって、これは教育長がおっしゃったんですけれども、いわゆる事業を行ったらば確かな検証を行うこと。検証の場合も、それを企画した行政側だけじゃなくて、関わった学校はもちろんのこと、関係機関とかさまざまに関連した人たちの声も反映して多面的に見ていくということを繰り返すことが大切だと考えます。それから事業全体でいいますと、白い星印が新規事業、黒星が拡充事業ですけれども、そういう事業については私たちは目的という意識が見えています、何のための立ち上げた事業なのかと。ところが、とかく継続することについてはやや所期の目的が希薄化するということが起こり得るのかなど。そうしますと本来の意味をなさない。だから、もう一度全ての事業について所期の目的をみんなで共有しながら事業の展開に私たちは当たっていかなければならないのかなというふうに改めて考えたところです。以上です。

○奥山市長 先ほど永広先生からもやはり継続というのが大きな眼目なんだということ。ただ、一方、人間というのは弱いもので、継続していると何か初心を忘れがちになるというそのことも踏まえながら、いかにして初心を忘れずに継続の実を上げていくかというのは難しい課題でありますけれども、そこに本当に取り組んでいかなければいけないというふうに思います。

最後になってしまいました。申しわけありません。齋藤委員、いかがでしょうか。

○齋藤委員 皆様がおっしゃってくださったとおりです。やはりせっかくこのように予算化をしていただいたのですから、ここの部分を私たちが本当に大事に義務としてよく

見ていくべきところだなと思いました。

それとあと、先ほど孤立という言葉が出ましたけれども、子供だけでなく親だけでなく、先生もやはり孤立をしてはいけないと思います。ですからこそ、孤立をしないためにも学校の中が風通しがよくあるべきですし、その学校に地域が入っていくことで先生方が少しでも仕事の多忙化が解消できれば、いじめとかそれから子供の関わりとかにもっともっと時間ができるのではないかと。それともう一つ同じく、時間という形では、先生方にはやはり魅力ある学校づくりとか、それから、自分自身、教員としての資質向上を目指すためにも時間や研修という基本的なものはやはりもっともっと積極的に設けていくべきだなということを今改めて思いました。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。教育長から何か補足は。

○大越教育長 私も若干補足させていただきます。

今、専任教諭のお話がありました。専任教諭でその人に全部仕事を集中させてよかったよかったという気はさらさらありません。これはやはり基本的には担任がそのクラスの子を見る。その担任の負担を少しでも軽減させることが目的の一つでもあります。専任教諭は組織として学校の組織のコーディネーターにもなってもらうんですが、担任の相談相手にもなったり、負担軽減の一翼を担ったりと。そこで、実は齋藤委員がおっしゃったように、子供はもちろん抱え込まない、先生も保護者も、これは全くそのとおりなんです。

昨日研修を受けたばかりなのでまたそのお話なんです、子供は必ず微弱でもSOSを発信していると。そのときに気づく。気づくときは大人が多ければ多いほど気づく確率が高くなります。そして関わる。関わるというのはケアということでもあります。つまり見ているだけじゃなくてそれに関わっていく。そしてつなげる。そのつなげるは大人につなげるという意味なんです。子供から大人につなげる。また、大人も大人につなげることはあると思います。特に専門家につなげると。そういう意味ではこの事業の、昨日研修を受けたことは何らかの形では入っているのかなと。専門家も配置する、そして専任教諭も配置することで担任が少しでも気づきの時間を、ゆとりも少しでもあればなというところで、最後は意識論になりますけれども、どれほどみんなが意識して、このいじめ対策に取り組んでいるかというのはもう少し長い時間が必要かもしれません、そういう点で、今回の予算をつけていただいた事業は、総動員といますか、関係する学校、保護者、地域の方々、そして子供自身に全て総動員して

関わっていくと。これはいじめだけではないと思います。学校で子供が先ほども言いました孤立しない、悩ませない、そして、どうしても今自死に対するハードルが低くなっている点において、そちらに絶対結びつかないような対策をさらにこれからも充実させていかなければならないと再認識しているところでございます。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。

ただいまは、今年度事業に関連して特に喫緊の大きな課題でありますいじめ、不登校、自死といったような関連についてご意見をいただきました。ほかに何かこの今年度事業に関連して追加的に皆様のほうから、これは少し注意を喚起しておきたいとか、もしくはこの事業の意図はどうだろうかというようなものはございますでしょうか。

○永広委員 米印がついていない事項ですが、先日の熊本地震、これはまだ継続中ですが、これを受けて再度防災教育について若干考えてみたいと思います。仙台市は3・11の後さまざまな防災教育を繰り広げてきました。中でも全国に先駆けてつくった仙台版防災教育副読本は非常に立派で、今年度もさらにこれが改訂されています。これを見ますと非常に多面的な内容をきちんと捉えていて、災害への予防から災害が起こった後の対処についてまでさまざまなことについて触れられていて、これは非常に優れた副読本になっています。内容を見ますと、単に海溝型地震で巨大地震プラス津波というような海溝型地震だけではなくて直下型地震についても取り上げられていますし、河川洪水あるいは内水洪水、あるいは崖崩れ、地すべり等の土砂災害、斜面災害と呼ばれるものにまできちんと言及されています。それは非常に優れているんですが、ただ現実を見ると、多分仙台市の防災教育はどうしても海溝型地震プラス津波への備えをどうするかということにどうしても偏重してしまうのではないのかなど。熊本地震を受けてわかることは、仙台市内にも実は直下型地震を起こすような活断層は幾つもあります。それから、最近は余り大きな災害にはなりませんけれども、河川水害だって起こり得るわけですし、都市型の災害としての内水浸水もあります。それから斜面のあるところでは必ず崖崩れ等がありますし、特に最近、大規模宅地造成での人工地盤というのはやはりいろいろな弱点を持っていて、地震等と結びつきの災害を起こすと。これらについてやはりきちんとした目配りをしていく必要があるのかなと思います。

こういうさまざまな災害というのはそれぞれ地域ごとにあらわれ方が違って、それは地域ごとにその地域の成り立ちが違って現在の地形とか地質構成が違っているこ

とによるわけです。この中には人工的な地盤の改変というのも当然含まれて、ですから画一的な防災教育というのは実はできないんですね。地域ごとにそれぞれ課題があり対処の仕方がある。学校でいえば学区ごとにそれぞれ特有の災害の危険があり、それへの対応を考えなければいけないのかなと。幸い、実は仙台市はこういう災害現象についてどこでどういう危険があるかということについてはきちんとしたデータを既に提供しています。地震ハザードマップとか津波からの避難の手引、これは3・11より前からありましたし、3・11を受けて改訂されたものになっています。それから、河川水害とか内水水害あるいは土砂災害については、これまで別個のハザードマップであったものが、たしか今年度になってからだと思いますが、まとめ上げられて、せんだい水害・土砂災害ハザードマップというのが新たにつくられています。さらに、もっと優れているのは、仙台市宅地造成履歴等情報マップというのができていて、どこでどれだけ盛り土がされ、埋め立てられているかというのがちゃんとデータとして出されている。だから、どこでどんな災害が起こるかというデータは全てそろっているんですね。それから活断層については、これは仙台市ではないですけども、例えば国土地理院が都市活断層マップというのをつくっていて、2万5000分の1の精度で活断層がどこに可能性が認められているかというのがきちんとあります。

ですから、こういうきちんとデータがそろっているということを念頭に置いて、地域独自の防災マップづくりというのを子供たちと教師とあるいは地域と一緒にやって行く。そして、もう一度足元から自分たちの地域にどんな危険が潜んでいるのかというのを見直しておくというのが必要ではないのか。熊本地震の際にもやはり被害が大きかった地域とそうでない地域が当然あります。それはもう最初から決まっていることで、それを知っているかいないかによっても対応も全く違ってくるのではないのかな。これは大変な事業だと思うんですが、防災教育を行うときにより一層多面的な取り組みをしていただければと思います。

○奥山市長 ありがとうございます。子供たちは、地域の安全・安心を考える中で防犯マップづくりというのは結構各学校、各学区で行われて、ここが暗がりだとかここに見通しの悪い街路があるとか、そんなことを勉強しながらまちづくりの改善をやってきたというようなこともありました。まさに今永広委員がおっしゃられたように、地域ごとに本当に危険のありよう、川に近い学区、また海に近い津波のおそれの高い学区、崖のところから学校自体も非常に急傾斜地に近い学区とかいろいろな地域状況がござ

いますので、それらを踏まえて常に自分が今どんなところにいるかというのを感度を高く持っていくというのは、子供たちが将来仙台を離れた場合にも、そこで学んだノウハウと申しますか、スキルのほうが知識よりも生きてくるといふ可能性も高いと思います。ありがとうございます。

ほかに何か事業に関連してお気づきの点等ございますでしょうか。草刈委員。

○草刈委員 人口減少社会に対応した教育についてというところで少し気づいたところをお話しさせていただきます。

高齢者の生きがいづくりにつながる子どもとの交流支援というものがありますけれども、なかなか地域ごとによる取り組みでもあると思いますので難しいとは思いますが、子供たちとの交流はやはり高齢者の生きがいづくりにつながるものとは思いますが、それと同時に異世代交流が少ない子供たちにとっても経験豊かな高齢者との触れ合いを充実させることはとても大切だと思っております。お年寄りや体の不自由な方と接すると、子供は相手に合わせてゆっくり話をしたり歩いたり自然に相手に沿うようになります。それは相手を思いやる心を育む原点だっさりと思っておりますので、そういった思いやりとか優しさとかというものを、何遍教えても身につくものではありませんけれども、自分が感じて行って応えていただいて初めてその意味を心で感じ取るものだと思っております。高齢者の方にとっても、日々新しい環境に親しむことができ、子供たちの元気と原動力をそのまま受けとめることで生きる活力を見出せるのではないかと考えております。

その取り組みとして、児童は児童館へ、不登校の生徒は杜のひろばへ、高齢者は高齢者施設へという壁を取り払って、さまざまな年代の人が一つに集まれるような場所やそのような機会を増やしていくこともよいのではないかと考えております。実際そういう施設に通う不登校の生徒の様子がある番組で紹介されておりましたけれども、とても自然にお年寄りに溶け込んでおりました。核家族化が広がり地域との関わりが希薄になっている現在だからこそ、そういう視点で異世代の人々と関わりを深めることに目を向けることが大切だと思っております。大先輩の人生に触れることができ、双方向での効果が期待され、生きる力、命の尊さというものを見出すものにつながっていくのではないかと考えておりました。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。先日、教育長と一緒に明治青年大学の開校式にお伺いしましたけれども、平均年齢76歳の皆様が、学校で昔遊び、伝承遊びの教えるボ

ランティアをすとか、またご自分がなされた職業体験をお話しなさるとかということとは非常にボランティア活動として人気も高いし、またやりがいにつながるというようなことをそれぞれおっしゃっていらっしやいました。本当におっしゃられるように子供たちにとってもとてもいいことであると思いますね。ありがとうございます。

ほかに何か事業に関連してお気づきの点等ございますでしょうか。齋藤委員、どうぞ。

○齋藤委員 まさに私も草刈委員と同じ気持ちがありましたので、付け加えになるかどうか分かりませんが、お話をさせてください。

私も社会参加のところですが、2ページ目の道徳教育の充実、こちらもぜひとも大事な部分なのではないか、それもつながるのではないかと思います。やはりこの道徳教育は、最初に申し上げたことに重複しますが、命の尊さの教育でありますし、この場合、学校も家庭も地域も共通理解を持って子供に接していき、自分のそれぞれの立場で責任を持って子供たちに伝えていくべき大切な教育であると非常に思います。先ほど草刈委員もおっしゃったように、いろいろな場面で子供が周りの大人と触れ合っていて認められるということが最初に申し上げたように自己肯定感につながるわけですし、自己肯定感が生まれ育てばおのずと学力向上にも子供たちというのはつながっていくのではないかと非常に思います。

やはり私も同じように社会教育施設の機能をもっともっと多くの一般市民の方たちにお伝えしていく立場でもあるのかなという気がいたします。例えば3ページ目の放課後子ども教室とか、それからあとは学びのコミュニティづくり推進とか、それから昔からあります社会学級とか、もう一度見直して、実は地域の人たちがたくさん学校に入る機会があるんだということをもっと教育委員会としてアピールするべきだと思いますし、学校に地域の人たちが入り込むだけではなく、実は学校もいつか地域に自分たちの生徒たちの、児童たちの力を手伝わせたいという気持ちが多分先生方にもおありだと思うんですね。そのあたりがやはりこの道徳教育の一番の環境教育であり、そして福祉教育、福祉につながる部分であると思いますので、ぜひともそのあたりで道徳教育を充実させていくべきではないか、これは全ての人たちが思うべきではないかということを感じました。

最後に一言だけ。子供たちにはやはり学校教育本来の先生方と触れ合い人間性に触れるとか、それから学ぶことの楽しいことだということや、それから友と集って楽しかったというような喜びとかをぜひとも子供たちには感じてほしいですし、そして、全

ての子供たちが自分の学校をいとおしい母校だというふうにはぜひ思ってもらいたいと願っております。以上です。

○奥山市長 ありがとうございます。さまざまな意味で道徳というのが広く、教科化にはなるわけですが、知識や学力というのとは違う、人を育てるというまた特別な役割を持ってきますので、それについては地域やいろいろなお力をかりながら進めていくということなんだろうなというふうにも思います。ありがとうございます。

ほかに事業の関係でございますでしょうか。

○今野委員 人口減少社会で草刈委員にプラスするというかお話ししたいと思うんですけども、最近、NHKで老後破産というような番組をやってまして……

○奥山市長 結構流行語のようになっていますね。

○今野委員 仙台がそれに該当するのかどうかというのはわからないんです。あれは東京だけの問題なのか、その辺ちょっとわからないんですけども、そういう意味では、ボランティアというのは収入ないわけですが、高齢者の方にボランティアと仕事を組み合わせて収入にもなるような分野とそれから完全なボランティアと、それでできればいい影響があると思われまして子供たちと触れ合う機会をつくれないうかということで、社会現象としてあれが、私も団塊のすぐ下なものですから非常に怖いなという感じでおりましたので、その辺もぜひお考えいただければ大変にありがたいと思います。

○奥山市長 ありがとうございます。やはりなかなか年金制度の中に組み込まれないまま高齢になってしまった方というのが日本の場合まだまだ社会的に多うございますし、家族が支え合うという、例えば年老いた親のために子供が仕送りするというような状況も難しかったりいたします中で、老後破産というのが今いろいろテレビのテーマになったり、また本も大分出ているようであります。それはどちらかという教育委員会よりは、この老後破産の問題は市長部局の主に私どものほうで相当に人口減少社会の中でこのことを考えていかなければいけないのかなと思います。いずれにしても、あまり収入の大きな部分にはつながらないかもしれませんが、ボランティア活動的な要素を加味しながら子供たちと接したり、また、シルバー人材センターのように地域や各家庭で求められる仕事をして相応の収入を得るといったような機構もございます。いろいろな形でそれぞれの人がささやかであっても自分が生きていることの意味とか手応えとかそれによる人間関係とかを持ちながら、ここで暮らしていることがよかつ



たなと思えるようなまちにしていきたいというのが本当に仙台にとっての大きな願いでありますので、ただいまのご意見も含めて市長部局のほうも襟を正して頑張りたいというふうに思います。

ほかにございますでしょうか。よろしゅうございますか。

1時半から進めてまいりましたが、おかげさまでいじめに関連しての本年度事業のさまざまな点からのご指摘、また、いじめのことも含めながら自死ということや自己肯定といったようなことについての幅広い多様な気づきの促しなど、貴重なご提言を数々いただいてありがとうございました。

それでは、時間でもございますので、今日いただきましたご意見等を踏まえまして、私もしっかりとこうした教育委員会が中心となって行います事案について対応を進めてまいりたいと思いますし、また、児童クラブとかその他子供のさまざまな活動は市長部局で行っているものも多々ございますので、そうした場もたくさん気づきやきずなにつながるような事業の運営にしていきたいと思いますので、引き続きよろしくお願いをしたいと思います。

私としては、具体的には事務局とご相談させていただいた上で、次回等の日程は今日の時点ではまだ決めていないものですから、また後ほどご相談をさせていただきたいというふうに思っております。

### 3 その他

○奥山市長 それでは、本日の会議は以上とさせていただきたいと思いますが、事務局から何か連絡事項などありますでしょうか。

○事務局 本日は特にございません。

### 4 閉 会

○奥山市長 では、お忙しい中、長時間にわたってご意見を賜りましてまことにありがとうございました。

本年度もどうぞよろしくお願いをいたします。